
龍の哭くとき

風吹流霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の哭くとき

【Nコード】

N8253W

【作者名】

風吹流霞

【あらすじ】

某県、各務町。県下随一の心霊スポットといわれているこの町の地下には、龍脈が流れているらしい。そんな各務町を守るために、東奔西走するひとりの神官見習いの少女の話。

設定

各務町詳細。

某県にある山間の町。何故か、心霊現象に事欠がなく、県下随一の心霊スポット化している。

学校は保育園2箇所、小学校4校、中学校2校、高校1校。大学、専門学校はなし。

電車、道路の交通網、病院などの生活基盤は整っている。

地下には、龍脈が走っている形跡があり、それを守る一之宮、二之宮、三之宮、四之宮が存在するが、二之宮は龍脈を守るため、当主が死亡。跡取りがいなかったため、断絶している。

主な登場人物

四之宮 しのみや 季和 ときわ

17歳。高校二年生。各務町の平和を守るために、日夜、魍魅魍魎と戦う女の子。

靈感、霊力ともにあるが、使い切れていない。

不器用、マイペースだが、れっきとした龍脈の守護者。

神官見習いで祝詞の使い手。黒髪のボブカットに鳶色の瞳。小柄。

父親に似たのか、きりつとした容姿。出し巻き玉子が好物。

四之宮 しのみや 季直 ときちか

45歳。季和の父親。前龍脈の守護者。

何年か前に、龍脈を狙う連中と戦い、怪我を負ってしまった結果、現役を引退。

今はよきマイホームパパ。黒髪、黒瞳。

実直な古きよき時代の日本男児といった雰囲気、近所のおばちゃん

ん達のアイドル。

いちのみや
一之宮 明継 あきつぐ

45歳。現一之宮家当主で通称宮様。季直とは親友。

切れ長の黒い瞳に、艶やかな絹のような黒髪を肩まで伸ばしている。高校生の息子がいるとは思えないほど若々しく、女性もうらやむほどの美形。

飄々とした性格であるが、計算高い面も持ち合わせている。

いちのみや
一之宮 明良 あきら

明継の次男、高校生、17歳。季和とは幼馴染みの仲で彼女の数少ない友人。

幼い頃は一緒の布団でお昼寝もしていた。

龍脈の守護者を守る守人もりびとの役目を持つが、今のところ、季和の同行はなし。

明るい茶髪に茶色い瞳。母親似。人懐っこいように見えて、実は心を見せないタイプ。

剣道三段保有者で、剣術を得意とした戦い方を得意とする。

おうか
桜花さん

季和が通う高校にある桜の巨木の九十九神。季和が名付け親。

たかさき
高崎 宗佑 そうすけ

定年間近の現役警察官。警部。各務には20年近く勤務している。

明良をクソガキと呼ぶのは、若い時に明良に悪戯の標的にされたことに由来する。

霊力、靈感は持ち合わせていないが、その辺のことに關してはかなり寛容で理解ある人物。

妻との間に3人の子供がいるが、現在は3人とも独立。定年後は、各務で妻と永住するつもり。

高井 涼^{たかい りょう}

高崎の部下で、大卒のエリート官僚。2年前に各務に派遣されてきた。

聞き込み、その他もろもろを器用にこなし、頭の回転もよく、知識も豊富な将来有望なエリート。

決して、美形ではないが、愛嬌のある顔をした好青年。黒髪、黒瞳。各務のコンビニに売ってある抹茶スイーツが最近のお気に入り。

自身は隠しているつもりだが、高崎には見抜かれている通り、靈感あり。

1・鈴鳴

某県、各務町。山間部にある片田舎町だ。

何の特産も無いようなこの町だけど、実は心霊スポットとして有名だったりする。

夏場はその客でにぎわうが、すぐに逃げ帰るらしい。逃げられるだけましである。

各務には良くない霊も居て、その場合は村の神社からお祓いに出向かなければならない。

各務はいわくつきの場所で、あちこちに合戦場の跡が残っている。戦国時代、何故か、戦国大名たちはこの地を手に入れようと合戦を繰り返していたようである。

豊臣秀吉が天下統一した後、一時的にこの場所は消された。文献上に再び登場するのは、徳川家康の時代。徳川幕府の直轄領、天領になっている。

徳川幕府は、この地に江戸から役人を派遣した。派遣された役人は、この地で結婚し、各務の人間になった。それが宮家の始まりと言われている。

宮家は、一々四あり、一番位が高いのが一之宮家、四之宮が一番位が低い。

一之宮が様と呼ばれても、四之宮は様と呼ばれることは無い。

昔は四之宮も様と呼ばれていたようだが、現在では一般市民と同じ扱いであった。

この宮家の起こりについてだが、一般人が知らない事実がある。宮家は、

各務に眠る龍脈を管理し、鎮め、守る――

日本で一番大きな龍脈は富士山にあるとされているが、そこからいくつもの支流が分かれている。

これが分龍、各務の地下にはこの分龍が流れているのだという。

分龍とはいえ、龍脈のひとつであるから、それなりに強大な力を秘めており、危険だ。

思えば、戦国大名たちはこの分龍をめぐって争っていたというわけだ。

慎重な性格であつた徳川家康は念を入れて、宮家を四つに分けた。

しかし、現在の今まで、四之宮が借り出されることはなかった。

四之宮は宮家でも末端であり、霊力も一之宮に比べれば微々たるもので、主に結界を張ったり、有事の際には、住民達を避難させる役割を担っていた。

その避難先というのが、四之宮が住んでいた宮神社であり、季和ときわの我が家だ。

季和の父親、四之宮季直は四之宮にはあるまじき霊力の持ち主で、

一之宮に匹敵するほどだった。

季直は一之宮当主の片腕となり、龍脈の守護者として働いていたが、何年か前に龍脈を狙った一味に襲われた。一個人としてはそこまでではないが、多勢に無勢で、父は重傷を負った。命に別状は無かったが、足に後遺症が残った。日常を送るには問題ないが、龍脈の守護者は引退せざるを得なかった。

さて、問題が残った。

龍脈の守護者を後継を誰にするか。

二之宮はその時点で血が途絶えており、次点の三之宮にはめばしい能力を持った能力者がいなかった。

というより、術の知識をまったく教えてなかったのである。

霊力があっても、知識が無ければ術を扱うのは危険すぎる。

ということ、白羽の矢が立てられたのが、前任の娘で知識も能力も問題が無かった季和だった。

四之宮季和について説明しておく、四之宮季直の一人娘である。母は幼い時に亡くなっているため、父1人子1人で育ってきた、生粋の父親大好きっ子である。

いつも、父親の後をついてまわり、一之宮にも小さいときは出入りしていた。

今はさすがに恐れ多くて出来ないが……。そのせいで、一之宮の術にも詳しい。

といっても、彼女に危険は少ない。彼女の仕事は各務のあちこちにある龍脈の封印の監視。

ほころびがあれば、術で補修をかけるだけという簡単なお仕事だ。

「バイト代も出すからね」

一之宮当主の言葉がとどめだった。

今までの生活費は当主から出ていたのかと、今になって気付いた。生活費を得るためには仕方ない。

渋る父親に、「危険なことはしないから」と約束させ、季和は守護者職を受け継いだ。

下弦の月が空にかかっている。

「さて、いきますか」

季和が行動するのは大体夜中の1時〜2時。いわゆる丑三つ時といわれる時間である。

この時間帯が一番危険で、力ある霊が龍脈に接触しようとする、

そのとき、龍脈の結界に綻びを生じることがある。

彼女の役割はその綻びを修繕することだ。

片田舎町である各務は、この時間帯は町民のほとんどが寝ているため、季和が目撃されることもなかるうという判断だった。

「今日はどこを廻ろうか」と彼女は地図を広げる。

龍脈は力が強すぎて、ひとつの結界では封印できないので、数箇所に分散して封印してある。

その数箇所はあちこちに分散してあるので、数日かけないと見回ることが出来ないのだ。

そこで、彼女はエリアを決めて、エリアごとに確認をしている。

数秒考えて、彼女は見回りの場所を決定した。そこは先日から気になっていたところだ。

あのあたり、数日前、人の出入りが激しかったからなあ・・・、ぶつかって壊してなければいいけど・・・。

夏場ではないにしろ、心霊スポットである各務町は深夜、それを目当てにやってくる物好きな若い男女が多い。

心霊現象に慄き、結界に触れて壊してしまうことが頻発する。それを修繕するのも彼女の役割だ。

本当、面倒臭い・・・

それでも、彼女は向かう。

車より降りた数人の若い男女。

「心霊スポットというわりには普通だよな・・・」

「本当に此処なの？」

「まちがっちゃいねえよ。ダチに聞いたしさ」

彼らが見つめる先にはただ、大きな岩が転がっているだけだ。

「何か、期待して損しちゃった、帰ろうよ」

「そうだな」

くると踵を返した彼らの前に、ゆらりと現れた影。

それに気付いた一人が、「誰？」と聞いてみるが返事は無い。彼らの背中にぞぞと寒気が走った。

ゆらり――

影はゆっくりと顔を上げた。

『・・・ニンゲン・・・、ミツケタ・・・』

その口から流れ出るのは、真新しき鮮血。

明らかに人間には出来ない笑み。影は、

にやり――

と笑った。

「ぎゃあああああ――！！！！」

「で、でたあああああ！！！！」

重なる若い男女の悲鳴。勿論、その声は季和にも届いていた。

はあ、遅かったか・・・

現場に駆けつけた彼女が目撃したのは、うずくまる若い男女数人。

「・・・か、体が・・・」

「・・・う、動かない・・・」

靈感のある彼女には、視えていた。武者鎧の亡霊が・・・。

龍脈の力を得るには、亡霊の姿より人間のほうが結界を外せるので、手っ取り早い。

しかし、

普通の人間が龍脈を扱うのがどれだけ難しいのか解っているのかな・・・。

怪我、気が狂う、最悪、体が力に耐え切れず内臓破裂で死に至る。

龍脈の力は普通の人間には毒すぎるのだ。

仕方ない、抜うか・・・。

季和は肩をすくめた。

がちやがちやと音を立てて近付いてくる甲冑武者。

逃げたいのに、体が動かない。こういうのを憑かれるというのだろうか。

チリン――

鈴の音が静寂を呼び寄せる。

「天神地祇――」

凜とした声が響いた。

1・鈴鳴（後書き）

季和の服装のイメージは、ミメイさん（知っている人いるかなあ）。

2・日常

亡霊を追い払い、結界張りなおし、帰路に着く。
家にたどり着いた時には既に、東の空が白みかけていた。
服を着替えて、季和は布団にもぐりこむ。

今日は、早く終わってよかった・・・

彼女は安堵する。ひどい時は結界の張りなおしが、夜明けまでかかるときもあるのだ。

布団に包まれ、まどろむ僅かな時間、僅かであっても朝の睡眠は嬉しいものだった。

まどろむこと数時間、ご飯の炊けるいい匂いで彼女は覚醒を促された。

幼いときに母をなくし、守護者として忙しかった父の代わりに、朝食を作るのは季和の役目だった。

といっても、小さかったので簡単に作れる洋食中心だったが・・・。
引退した今は、父自らが進んで家事を行っている。現在、四之宮家は父の影響で朝食はご飯派である。

制服に着替えて、布団を畳んでいると、部屋に近付いてくる足音に気付いた。

「お父さんかな・・・」

彼女の呟きに応えるように、父、季直の「朝ごはんできたぞー！」の声が部屋の外から聞こえてきた。

「はい、今行くよ、お父さん！」と返事を返し、彼女は部屋を出て、居間に向かった。

今に足を踏み入れた彼女は、その鳶色の瞳を丸くした。

「な、何で、宮様がここにっ!？」

四之宮の居間で、沢庵をつつき、味噌汁をする一之宮家主、一之宮明継を見て、季和は絶句する。

四つの宮家の最上位の人間を見れば、最低位の四之宮家の彼女が仰天するのも無理は無い。

しかも、その宮様が、四之宮家で自分達と同じ食事を取っている、これは彼女にとって卒倒しかねない事態である。

当の本人は、台所から出てきた父に味噌汁のお替りを頼み、父も文句を言わず実行している。

「何をつつ立て居るのかな、ときちゃん。早くご飯食べないと学校遅れるよ?」

宮様は季和のことを「ときちゃん」と呼ぶ。

季和の名前は、漢字を見れば女の子らしいが、「ときわ」は女の子らしくないということで、わざわざちゃんづけをしているのだ。

その声に促され、時計を見れば確かに悠長にご飯を食べている時間は少ない。

慌てて、彼女は腰を下ろすと、「いただきます」と手を合わせた。

宮様、一之宮明継は、確か父と同年代であるが、高校生ぐらい息子がいるような年齢にはまったく見えないぐらいに若々しい。

絹のような光沢のある艶やかな黒髪を肩に流し、切れ長の黒曜石のような双眸には知性的で、思慮深さも見受けられる。

若い頃の宮様の写真を見せてもらった時があるが、写真でもわかるような美青年。

加えて、年を取ってからはその美貌に円熟味があわさり、えもいわれぬ渋さをもし出している。

はつきり言って、宮様は女性すらうらやましがるとの美形である。

幸いながら、宮様は既婚者であり、既婚者を狙うほどの勇者はこの各務にはいない。

むしろ、気をつけなければならないのが、季和の父親、季直だ。父は無骨で実直、例えば古きよき日本の侍のような気質の持ち主である。

宮様のように美形ではないが、無骨なりの優しさ、たまに見せる笑顔が素敵な人物だ。

季和は彼の時折見せる笑顔が大好きだった。

実直さというのは、時に美形よりも好印象を与えるものらしい。

そんなわけで、父は近所のおばちゃんたちのアイドルと化していた。本日の朝ご飯の献立は、炊きたての真っ白なご飯にわかめの味噌汁、ほうれん草のおひたし、沢庵、出し巻き卵、ご丁寧に味付け海苔までついている。

季和は味噌汁をすすってから、出し巻き卵を口に入れた。

口に入れた瞬間、ふわりとだし汁の芳醇な味が広がる。

彼女は、父親が作ってくれる出し巻き卵が大好きだ。

そんな表情が顔に出ていたのだろうか。

「ときちゃん、本当に好きだね、出し巻き卵」

宮様がにこにこしていた。「放っておいてください」と、彼女は二切れ目を放り込む。

「そういえば今朝はいつもより帰還が遅かったみたいだね」

思わず顔を上げた彼女は、季直と目が合った。

気付いていたのか・・・

こっそりと戻ったつもりだったが、明け方でも父は気付いていたらしい。

どうやら、実力共に四之宮の当主である季直を騙すのは当分難しい

のかもしれない。

実力者たちの無言の圧力に抗えるほど、季和は強くも図太くも無い。実際、秘密にするような話でもない。

逆に、話しても実にならない話で、彼らの耳に入れるまでもないと彼女は判断したのだ。

「たいしたこと無いですよ、馬鹿が結界の近くで騒いでいただけです」

ほうれん草のおひたしの小鉢を手にした季和の口調は辛辣そのもの。「なるほど」と宮様はそれだけで察したようだった。

心霊スポット、馬鹿というキーワードが出ればおのずと答えははじき出される。

「またか……。これから暑くなってくるし、増えるな……」

迷惑と思いつながらも、止めないのは彼ら、都会の馬鹿が町にもたらず利潤を無視できないからだ。

宮様も複雑な心境なのだろう。

「ときちゃん、ごめんね、これからまた、ときちゃんの手煩わせることになりそうだけど」

「問題ありません。それが守護者の役割ですし」

彼女はきっぱりと言い放った。守護者の役割なら、守護者である自分の役割だ。

先代であり、尊敬している父の名を汚さないように。

残った味噌汁を流し込み、彼女は「ご馳走様」と箸を置いた。

2・日常（後書き）

季和の好物は出し巻き卵です。特に甘くないのが絶品らしい。

3・桜日和

季和が通う高校は、家から歩いて20分ほどのところにある。

宮神社は少し小高い丘の上にあるので、その丘を下り、そこからまた高校へ行くのに坂を上らなければならなかった。

小さい頃からの慣れで、坂を上ったり下ったりに関しては、ほぼ問題が無い。

校舎に入る前には、桜の巨木がそびえている。

新学期の際には薄桃色の花びらを満開にさせていたが、いまや葉桜だ。

この桜の巨木は、学校建設の前からそびえていたという話がある。

彼女は側に人が居ないことを確かめると、桜の木に駆け寄った。

ざらりとした木の幹に触れる。

良かった、結界の綻びは無い・・・

この桜の木も龍脈を守る結界のひとつである。

こうやって毎日、学校へ行く際に確認が出来るので、夜中の巡回からは外している場所だ。

健全な高校生である季和は通常時、寝ているはずの1時、2時あたりに行動するのは酷で、ひとつでも、見回りの量を減らしたいと思うのは普通の心理だろう。

この高校で語り継がれる七不思議も、龍脈の影響を受けた心霊たちが活発化しているために起きる現象だ。

こつんと彼女は桜の木に額をくっつけ、眼を閉じる。

ごめんね、結界の依り代になんかして・・・

ふわりと葉桜が揺れた。「気にするな」と言われているようだ。普通、植物に自我はないが、長い年月を経た生き物には自我が宿る時がある。

これを付喪神つくもがみと呼ぶ。

実際には九十九神つくもがみというのが本来に近いようである。

九十九は百にひとつ足りない、つまり、神になれない、そして、ヒトでもない。

そういった意味がある。この桜も一種の九十九神なのだ。

季和は「桜花さん」と呼んでいる。不安定なものは、名前をつけると安定するものだ。

自我を持った頃の桜花さんは、今より全然不安定だったので、彼女が名前をつけて安定させた。

今の桜花さんは、時折、花びらや葉桜を桜の木にいる人に落とすといった小さなかわいい悪戯をするぐらいで、特に問題行動は起こしていない。

季和は名残惜しそうに、桜の木からはなれた。

二年の教室に入り、窓際の自分の席に腰を下ろす。ここは桜の木がよく見える場所だ。

桜の木を眺めていると、ぽつりぽつりと生徒達がやってくる。

お互いに挨拶を交わすが、季和には気付かない。

元々、学校では目立たぬように気配を隠しているので、教師すら存在を忘れることもあるらしい。

その存在感のなさを利用して、あぶれそうな科目には参加していない。あぶれれば、注目されるからだ。

担任が入ってきて、朝のHRが始まる。

教師の声を聞き流していると、1限目開始のチャイムが鳴った。

いくら気配を隠しているとはいえ、授業はちゃんと受けるし、成績も中ぐらいで頑張っている。

朝の授業を終えると、勢いよく走り出す生徒。

この高校は購買、学食が揃っているが、弁当持参の生徒が多い。生徒は各自、机をくつつけて、友達と食べる用意をしている。季和も弁当持ちだが、そういった友達は皆無に等しい。

彼女は弁当の入った鞆を手に、教室を後にした。向かう先は屋上だ。良かった、開いている・・・！

時々、屋上に向かう扉が閉まっていることがある。

閉まっていた場合、弁当を食べる場所に困る。

いつも、心中開いてますようにと祈りつつ、屋上に向かうのだ。扉を開けると、初夏のさわやかな風が通り過ぎる。見上げれば透き通った青空が広がっていた。

「夏が近いな・・・」

季和は思わず呟いた。こういった感覚は日本人であるからこそその感覚かもしれない。

人の居ない屋上は、学校で彼女が素をさらけ出す唯一の場所でもあった。

目が付きにくい端に移動し、弁当を広げる。弁当は父の手作りで、無駄に豪華だ。

「・・・こんなに食べられるわけがないよ・・・」

彼女は「はあ」とため息をついた。

せっかく作ってもらったのが、食べきれない自信が無い。

好物のだしまき玉子を一切れ、口に入れた。

相変わらず、父のだしまき玉子は季和の好みに合わせてあって、絶品だ。

ゆさりと葉桜が揺れたような気がした。

えっ・・・？

弁当を床において、陰から出ると屋上に1人の女生徒が立っていた。校章から見るに2学年。その姿はとても危うい。今にも飛び降りそうなの・・・。

まずい・・・！

季和の頭に警鐘が鳴り響く。

この屋上は、結界を施してある桜の真上に当たる。

自殺されたら、その血で結界が穢れてしまう・・・！

それは穢れた存在を結界付近に招き寄せてしまう。

彼女はそこまでは考えていないのかもしれないが、守護者としては非常に困る。

季和は思わず飛び出した。今にも飛び降りそうな女生徒を抱え込む。しかし、

「くっ・・・！！」

女性とは思えぬ力で抵抗され、跳ね飛ばされた。

もしや、これは、霊が操っている・・・？

目を凝らせば、確かに着物姿の女の亡霊が視えた。

女生徒は、季和を認めるとにたりっと笑った。その笑みは背後に視える女の亡霊の笑みと同じだった。

払うしかないのか・・・！

逡巡している間に、女生徒はフェンスを越え、身を宙に躍らせた。女の亡霊が勝ち誇ったような笑みを浮かべた気がした。

「この地の力の分はこちらにある！」

彼女は叫んだ。自我を持つ彼女の名を・・・。

「桜花さん・・・！！」

しやなりと葉桜が揺れた。

了承したという承諾の返事だったのか、身を躍らせた女生徒は桜の枝に引っかかっていた。

亡霊が「まさか」という表情を浮かべていた。

ちりん――

鈴の音に亡霊は、音のした方角へ視線を移した。鈴の音色の正体は、季和のキーホルダーだった。

「天神地祇――」

彼女の朗々とした声が祝詞を紡ぐ。

ちりんちりと澄んだ音を響かせる鈴を手に、亡霊へと一歩ずつ歩みを進める。

一歩進むごとに、亡霊が一歩後退する。

恐らく、女生徒を操ることは出来ないはずだ。女生徒は既に桜花さんの手の中。

桜花さんの清浄な気に対し、亡霊はそうやすやすと近づけないはずなのだ。

「はらいきよめたまえ——」

季和は朗々と祝詞を結んだ。女の亡霊は青空に透けるように消えた。本職の鈴は学校に持ってこれないので、どうしようかと逡巡の末、キーホルダーについていた鈴を代用したのであるが、どうやら、キーホルダーの鈴でも効果はあったらしいと彼女は、安堵した。

鈴の音色は悪霊を祓う効果があると聞かされて、幼い頃、狙われやすかった彼女に父親が渡した事から始まっている。

何故か、季和は鈴の付いたキーホルダーやストラップを好むのだが、それはそのあたりの深層心理が働いている結果なのかもしれない。屋上から覗くと、下は騒然となっていた。

飛び降りを目撃したらしい生徒達が集まってきていた。

後で桜花さんに礼を言うておこう。

彼女は踵を返し、屋上を後にした。

午後の授業は、飛び降りのことでもちきりになり、授業にならなかった結果、自習になったことは言うまでも無かった。

3・桜日和（後書き）

年を経た植物は、霊力を持つため、結界の要にされています。
今回登場した桜花^{おつか}さんの他にも、梅の木の梅香^{うめか}さん、桃の木の桃子^{ももこ}さんが、季和が名付け親の九十九神さんです。

4・魔都

「魔が差した・・・か・・・」

各務署刑事課警部高崎宗佑警部は調書のページを捲りながら、背もたれ椅子にもたれる。

そのはずみでぎしりつと椅子が鳴った。

各務署は3F立ての鉄筋コンクリートの建物である。

外見は汚れてくすんだ灰色、中は雨漏りこそないが老朽化が進み、あちこちでひびが見受けられた。

耐久テストを受ければ、まごうことなく不合格の印をもらうであろうことは確実である。

その中に、生活安全課、交通課、刑事課がある。

主に動いているのは前者二つであり、刑事課は窓際のような存在だった。

それも仕方が無いことだと高崎は思う。片田舎の各務は事件らしい事件が起こる事が少ないのだ。

そんな中で起きた女子高生の不可解な自殺未遂。

「事件か!？」と色めきたった刑事課だったが、件の女子高生に話を聞いてみれば何のことは無い。

「いきなり、飛び降りたくなった」

それこそ、魔が差したのだ。

学校と言つのは、警察も手が出にくい機関であることは間違いない。

どうしたもんかねと彼は肩をすくめた。

「うちの若いもんは張り切っているからなあ・・・」

高崎の部下、高井涼は各務に赴任して2年目の新米刑事だ。

これといった事件がなく、出番が無い出番が無いと落ち込んでいた。高崎は高崎で「刑事の出番が無いのは平和な証拠だ」と思っている。しかし、血気盛んな若者には不満だったらしい。

事件の報を聞くなり、勇んで署を飛び出していった。恐らく聞き込みに走っていることだろう。

若いっていいやね・・・

そんな後輩の後姿を高崎は、生温かい目で見守っていた。

俺にもあんな時代があつたっけな・・・

高崎は高校卒業後、警察学校を経て警官になった、所謂たたきあげの人間である。

勤続40年以上、あと数年で定年を迎える。

3人の子供はとうに成人を迎え、それぞれの人生を送っている。

定年後は妻と悠々自適に、この各務町で暮らそうと兼ねてより決めており、妻もそれに同意していた。

しかし、調べれば調べるほどよく似ているなあ・・・

勤続40年は伊達ではない。

ましてや、各務の勤務年数は20年以上になる。

その中で、今回の事件に類似する事件は過去、数回も起きていた。頻発していると言っても良い。

恐らく、高崎が知っている事例は氷山の一角に過ぎないだろう。

実際にはもっとあったと思われるが、ただの転落事故として処理さ

れている可能性が高い。

この事件、過去の類似例にも死者はひとりもでていないのだから。

手に取った出がらしのお茶は既に冷めていた。

そのお茶を一気に呷ると、お茶の苦さが広がった。さめた出がらしのお茶は予想以上に苦かった。

新しくお茶を入れようと高崎は立ち上がった。

ゆつくりと部屋の扉が開いて、20代半ばぐらいの青年が顔を覗かせた。

黒髪に黒瞳、決して格好いいというわけではないが、愛嬌のある顔立ちをした好青年だ。

「高崎さん、お茶なら俺いれますよ」

につこりと笑みを浮かべた彼に、「すまん」と高崎は自分の湯飲み茶碗を手渡す。

上司のお茶汲みは部下の仕事という風潮がある。女性がいないというのにも一因の一つなのだが。

「聞き込みついでに買ってきたんですよ」と彼はコンビニ袋からスイーツやらなにやらを取り出した。

なるほど、そういうことかと高崎は納得する。

聞き込みではなく、あくまで世間話として、世間話をしてほしいということで聞き出したのだろう。

そのためには、何か買わないと、気まずいものがある。

「あ、俺の抹茶プリン、取らないでくださいよ！」

お茶を汲みながら、高井の発言。抹茶系スイーツは彼の好物だ。戻ってきた高井は、ちゃっかり、自分のお茶も淹れていた。

嬉々として抹茶プリンのふたを開ける高井を尻目に、高崎は熱いお

茶を口に運んだ。

「それで、被害者について聞いてきましたよ。この町でコンビニはあそこだけですしね」

「何かわかったのか？」

高井は首を横に振る。

「本当に普通の女子高生なんですよ」

都会に憧れているけれど、地元が嫌いではない。

周囲の女の子達にあわせて、流行を追いかけてみたり、化粧にも興味があつたり・・・。

友達と一緒に格好いい男の子で盛り上がったり。

「その憧れていた男の子というのが、一之宮明良らしいですよ」

「一之宮明良、あのクソガキか・・・」

高崎の顔に皺が寄る。

「高崎さん・・・、クソガキって・・・」

「あのなあ」と高崎は頭を掻いた。

「俺はあいつが赤ん坊の時から知ってたんだぞ」

実際、彼は一之宮家の次男とは生まれる前から各務にいたので、生まれたときからの付き合いだ。

小さい頃は悪戯好きで、高崎はよくその悪戯の対象にされた苦い思い出がある。

その記憶を掘り起こしてしまい、「クソガキで十分だろ・・・」と彼は苦虫を噛み砕いたような表情を浮かべた。

「確かにあいつ、見目はいいからな・・・」

高崎は煙草を取り出し、一本くわえた。

「高崎さん、禁煙するって話じゃ・・・」という高井の声は無視だ。一之宮家の当主夫婦は美男美女で有名だが、美の性質は違いがある。当主の明継は艶のある美男で、妻の春香はほわほわとした癒し系美人だ。

明良はどちらかというと母親の春香に似ている癒し系、年上女性にもてそうなタイプである。

「その一之宮明良と四之宮季和が親しいという話がありまして・・・」

「それが原因というのは、おかしいな」

高崎は高井の考えを一刀両断した。

「一之宮と四之宮は父親同士が親友で仲がいいからな・・・」

早くに母親を亡くしている四之宮の一人娘は、一之宮に出入りして
いて、春香にも可愛がられていた。

その中で、同い年である明良と季和が仲良くなならないはずが無い。

クソガキのくせに、幼馴染みが近所の悪ガキにいじめられているの
を見るとすっ飛んでいった明良を思い出した。

「両家が仲がいいのは、各務じや普通に知られていることだぞ」

「そうですか・・・、とすると・・・」

「事故だといییようがないな・・・」

奥歯に物がはさっているような言い方しかできなかった。

「事故・・・ですか・・・」

高井は納得していないようだ、無理も無い。

「過去にもこれと類似する事故が起きている。そういうことが起き
やすい場所なんだよ、ここは・・・」

恐らく、原因は此处以外では通用しない。

「原因がもしあるとすれば、高井、お前にも心当たりがあるはずだ」

高崎の言葉に、一瞬驚いたような表情をした高井だったが、すぐに

「そんな馬鹿な・・・」ととばけた。

アタリだな・・・。

高井は高卒の高崎と違って、大卒のエリートだ。

大学を出て、警察に入ると、最初に警部補という役職を与えられる。
今の高崎の役職、警部よりひとつ下の階級だ。

そんなエリートが、わざわざひなびたこの各務に異動を命じられる、何かあったかと勘繰るのも無理はない。

聞き込みはなかなか堂に入っているし、何をやらせても器用にこなす。

頭の回転もいいし、知識も豊富。

有能で、しかも浮いた話もない有望なエリートをわざわざ、各務に飛ばすとは考えにくい。

つまりあれだ。各務の人間に馴染み深いあれに関わるのだろう。

各務に派遣される警察官は、何故か、あれ側に比較的寛容な人間が送られてくるのだ。

もちろん、高崎も寛容な警官だろう。

「高井、各務のカガミの由来知っているか？」

「えっ？いえ」と否定した高井だが、さもありなん。

高崎も各務に赴任してくるまでは知りえなかった。

「カガは古語で蛇、カガミは蛇身。蛇を冠する町の蛇は何を意味しているのだろうか・・・」

高崎は煙草をくゆらす。

「この町はよくも悪くも魔に魅入られた町なんだよ」

煙草の灰が手にした灰皿にぽとりと落ちた。

4・魔都（後書き）

高崎さんの造詣はあれです、イージスの仙石伍長。
うちの小説のおっさん方は、この方の影響大きいです。

5・花紅柳緑

月をまたいで、五月。

連休が終われば、さすがの新一年生も落ち着いてきたようである。

ある者は4月の体験入部を経て入った部活に、ある者はバイトに精を出している。

季和は、部活もバイトもしていない。

どちらも一度はやってみたいという気持ちはあるが、決して器用ではない自分は、守護者の役目に支障がない程度にというのは難しいだろう。

守護者の役目を負ってから、この役目ひとつだけに絞り、邁進していた。

むしろ、守護者の役目がちよつとしたバイトである。

運動部の威勢の良い掛け声を聞きながら、帰宅の徒についた。

高校から商店街までの道は普通に道路で車も通れるが、商店街から神社に向かう道は農道で車一台が通ればいいほどの細い道だ。

農道の脇には石楠花が、薄桃色の花を咲かせていた。

5割咲きかな・・・

満開になる石楠花の薄紅色の花を思い浮かべ、思わず笑みがこぼれる。

先日、町を突風が襲った。

龍脈を抱く各務の町民はそれぐらいでは慌てない。

「ああ、竜神さんがご機嫌斜めね」ぐらいで、のんびりしたものである。

しかし、それが何回も続くとなれば、宮家が過敏になる。

これは、ガス抜きが必要かな・・・

季和は眉をひそめた。

膨大なエネルギーを秘める龍脈は、時に守護者の結界を上回るほどのエネルギーを溜め込むことがある。

そのエネルギーを封じするために、新たな結界を張ることも可能だが、前以上の強い結界を張らねばならなかった。

こういうことは結構あるため、そのたびに強力な結界を張ることになるが、それは術者にとってかなり負担を強いることになる。

その負担を強いられるのは、主に龍脈の守護者であり、現在、その任務を請け負っている自分なのだ。

任務とあらばやらざるをえないが、それで倒れてしまっただけは任務も全うできない。

それならば、逆にその溜まり続けたエネルギーを開放してやり、最小限の結界で済ますことができれば万々歳。術者の負担も軽い。

しかし、問題はいかに住民に被害が及ばないようにエネルギーを開放してやるかである。

ご存知の通り、龍脈のエネルギーは莫大だ。色々な現象に関与している。

たまりにたまったエネルギー全てを開放すれば、この各務が崩壊してしまうぐらいの威力を持っている。

そんなものを町に放てば、住民はひとたまりも無いだろう。

問題は結界を一旦解き、エネルギーを放出する場所とその数。そして、その龍脈開放の間、ここぞとばかりに龍脈を狙ってくる霊たちから、龍脈を守ることだった。

エネルギーを放出することに成功したとしても、霊たちに龍脈を奪われてしまっただけは意味が無いのだ。

龍脈は開放する場所によって、現象は千差万別。開放してみなければわからない。

この龍脈開放は歴代守護者と宮家の相談によって決定される。近々、その話し合いの場が設けられるだろう。

その話し合いのために、現守護者である自分は、解くであろう龍脈の結界を見繕っておく必要性がある。

季和が龍脈開放を体験するのはこれが初めてだった。

これからが大変だ・・・

季和は初夏らしい青空を仰いだ。

ぼつぼつと花を咲かせる石楠花の薄桃色のトンネルを抜ければ、季和の実家宮神社に辿り着く。

何故か、農道は季節それぞれの花が咲く。

誰か、手入れでもしているのだろうか。

目の前に石造りの鳥居が見えてきた。幼い頃から自分を見送り迎えてくれた二体の狛犬。

彼女にはその表情が笑っているかのように見えるのだ。

宮神社の建立は江戸時代初期といわれているので、比較的新しいほうなのかもしれない。

しかし、神社建立の前にも別の神社が建っていたらしいので、土地自体はそれなりに古いのだろう。

祭神は高^{たか}淤^{あか}加^か美^み神^{のかみ}と思^{おも}兼^い神^{かね}の合祀。

高淤加美神は京都貴船の貴船神社の祭神であり、祈雨、止雨、灌漑の神として有名である。

淤加美神の別字、？は龍の古語であることから、高淤加美神は龍神ではないかと思う。

高淤加美神を祭る貴船神社は他にも、縁結び、縁切り、呪詛で有名である。

平安時代、丑の刻参りといった呪詛が流行った。これは謡曲「鉄輪^{かなわ}」に詳しい。

しかし、丑の刻に貴船神社に参るというのは祈願の仕方のひとつであり、それを呪詛と結び付けてしまったため、呪詛の神として有名

になっただけで、本来は呪術の神であつたのかもしれない。
なぜならば、水は呪術ときつてもきれない間柄だからだ。

現に貴船神社がある貴船は水に恵まれた土地である。

同様に高淤加美神を祭る宮神社も水に恵まれた土地だった。

それを証明するのが、先祖代々四之宮家を守り、呪術に使ってきた古井戸。

この古井戸は、旱魃でも枯れたことが無いといわれる井戸で、季和もまたこの古井戸に霊的な力を感じていた。

この霊力を秘める古井戸もまた、龍脈の封印のひとつである。

霊力の高い古井戸の水は、呪術にも使えるが、町の人いわく、飲みやすくおいしいらしい。

境内にあるとはいえ、古井戸は四之宮の財産ではないので、所望する人には無料で提供する。

さすがに、一回に持つて帰られる上限は決めているが・・・。

思兼神は智慧の神様として有名である。

アマテラスが天岩戸に閉じこもってしまった際、知恵を授けたのもこの神といわれている。

学問の神様でもあるから、正月などは受験を控えた受験生がよく参拝にやってくる。

神社の本宮は春日造りと呼ばれる建築様式で、右側に榊の木、左側に橘の木。

周囲は桜、梅、桃の三種の木々が取り囲んでいる。

桜が満開になる頃には、町民が集まって神社境内で花見を楽しむので、神社をしばらく夜間開放する。

6月になると、境内の梅の木が黄色い実をつける。

その実を梅干にしたり、梅酒にしてみたりするのが父、季直の趣味だった。

その季節になると、社務所内が梅のすっぱい匂いに充満されること

になり、季和は唾液との戦いを強いられる。

現在、5月なので、あと一ヶ月もすればその戦いを今年も繰り広げなければならぬ。

恐ろしい戦いだぜ・・・

去年の凄まじい攻防を思い出し、彼女はごくりと唾を飲み込む。
彼女は鳥居をくぐり、慣れ親しんだ神域へと足を踏み込んだ。

6・筒井筒

各務は古来、花崗岩の産地であつた。

戦後数十年までは県下でも随一の生産地であつたらしく、そのときの名残が宮神社のお手水である。

参拝者はこのお手水で手を洗い、口をすすぎ、本宮へ参拝するのが通例。

そのお手水は花崗岩の一枚岩をくり貫いて作つた大層なものであつた。

寄贈は戦後30年ほど後なので、当時の宮神社の権威をうかがい知ることが出来る。

今でも、近所の人や氏子さんには、「お宮さん」と呼ばれ、親しまれている。

参拝用に整えられた石畳は、綺麗に掃除がされており、塵ひとつ落ちていなかった。

境内の掃除は主に父親、季直の役目なので、自分が学校に行っている間にせつせと掃いているのだろう。

その石畳に沿つて歩みを進めると、本宮がある。

そこに、見覚えのある後姿を季和は認めた。

染めていないのに、日本人離れした明るい茶色い髪。その肩には鉄紺色の布袋が置かれていた。

中身は恐らく竹刀か木刀だろうと彼女は推測する。彼女が推測するであろう人物であれば・・・。

境内に入る自分の気配に気付いたのか、彼の人物が振り返る。

振り返つた彼の人物は予想通り、季和の思い描いていた人物であつた。

くりつとした大きな瞳は女の子にとっては可愛いと思えるパーツであるうが、彼にとっては童顔と言うコンプレックスを刺激するものらしい。

童顔のクセに、やたら背だけは高いんだよな、こいつ・・・

自分より頭ひとつ分は高い身長は、中学になってからぐんぐんと伸びたため、季和が小学生の時代はほぼ身長は変わらなかった。

それこそ、背の比べっこをしあった仲だ。

そう、彼の人物は季和の幼馴染みである一之宮明良。彼女が宮様と呼ぶ一之宮明継の次男だ。

年齢は17で同い年。ひとつしかない高校も一緒だが、クラスは違う。

部活は剣道部で2年でエースらしい。

明良の明るい茶髪や、童顔は母親の春香譲りであり、思春期を迎えた中学生からは、同年代から「年上キラー」と賞されるほど、年上の女性に人気があった。

顔は童顔だが、身長は高いし、剣道部のエースというギャップがたまらないらしい。

父親が龍脈の守護者という特殊な事情もあり、季和は小さい頃はよく一之宮家に入出入りしていて、同い年の明良とは一緒に遊んだ仲だ。逆もしかり、父親がいない場合は明継や春香が気を付けさせ、明良を宮神社に赴かせることもあった。

宮神社の境内、しかも古井戸の近くで遊んだ。

そのことを後で父親に聞かせたら、苦笑されたのだが、その当時は何故なのか理解できなかった。

その苦笑の理由は、中学に入り、古典を学び始め、「筒井筒」と呼ばれる言葉を知ってからだった。

しかし、何度も言うように、季和は彼に対し、幼馴染みという感情以上の感情は持ち合わせていない。

明良も同様に、幼馴染みの危機を救おうと協力してくれているのだらうと思う。

「よう」

正門から境内へ入った季和の姿を認め、彼はぶっきらぼうに手を挙げた。

「やあ、明良」と彼女も気安く挨拶をする。次いで、出た言葉は、
「珍しいね、宮神社に直接来るなんて・・・」

明良が宮神社にちよくちよく出入りしていたのは中学生にあがるまで。

それ以降は足が遠のいていた。それにあわせて、季和もまた一之宮家から足が遠のいていく。

「親父に無理やり連れてこられた」

明良は不機嫌そうだ。「第一・・・」と彼の愚痴が始まった。

「俺が学校終わったからといっても、季和が同時に学校終わるなんて確定しているわけじゃないのにさ」

云々。

彼の話からすると、授業が終わったところで、父親に拉致され、無理やり連れてこられたようである。

剣道部に出れなかったことも、彼の不機嫌さを助長させているのかもしれない。

「明継さんは中？」と彼女が向けた視線の先は社務所だった。「ああ」と明良は頷く。

季和は普段、明継を宮様と呼ぶが、明良の前では気を使って、「明継さん」と呼ぶ。

誰だって、自分の父親を「様」と神聖視されるのはかなわない。

「いきなり宮神社に行く言われて此処まで来たけど、季和、お前わかるか？」

俺にはさっぱりだぜとおどけてみせる彼だが、事の重大性は重々承知しているようだ。

「まあ、大体はね」と彼女は応えてみせた。

「龍脈の開放について」

おのずと彼女の声は小声になる。龍脈の開放は極一部、限られた人間にしか公表されない。

悪意のある人間が開放中に、龍脈を得たらと考えると恐ろしいこと、この上ないのだ。

はからずしも、守護者を守る守人である明良は「ああ」とようやく納得したらしい。

「龍脈は強大な力を持っていながら、不明なことが多すぎるからな・・・」

小声になった彼女に合わせるように、明良は神妙な顔つきになった。龍脈に関わる家系という自覚はあるらしい。

「各務の自然現象に関わっている可能性があるから、うかつに行動できないのが辛い」

龍脈に各務の住人達を人質に取られているようなものである。

よく考えて動かないと、各務の全てを失うことにもなりかねない。

「とりあえず入ろうか」

と季和は明良を促し、社務所に向かって歩き出した。

7・想

宮神社の社務所の玄関はそれなりに大きい。

神社という建物柄、祭りになれば氏子数人が社務所に待機するので、靴を脱ぐ時、団子になって靴を脱ぐなんて事態が起こらないようにするためだ。

「親父たちはどこに居ると思う？」

そんな風に明良が聞いてきたのは、幼い頃出入りしていた彼でも、社務所の全てを知っているわけではないからだろう。

まして、彼が四之宮家に入入りしていた頃より10年近くもたっているから、多少様変わりもある。

「応接間か父さんの私室か・・・」

季和は考える。

父の私室は畳4畳ほど、あくまで私室であって人を呼ぶには適した部屋とはいえない。

せいぜい3人が限度、それもぎゅうぎゅうで狭苦しい中、重要な会議が出来るとは思えなかった。

これが季直と明継2人だけでの会議なら、後者も考えられるが、今回は明良もいる。

となれば、前者の可能性が高い。

「応接間かな・・・」

社務所には氏子さん達が待機できる広い部屋があり、障子で区切ることができる。

応接間に関しては、10年ぐらい前から様変わりは無いので、明良

でもすぐ解るだろう。

その言葉を聴いて、「わかった」と彼は頷き、一足先に応接間へと走っていった。

一目散に走り出した明良の後姿を眺め、季和は肩をすくめる。

「真実は逃げないのに・・・」

自身も応接間に向かって歩き出した。

一足先に応接間に向かった明良に次いで、彼女は応接間の障子を開ける。

「季ちゃん、おかえり」

明るく笑顔を振り向くのは明良の父親、明継だ。

「た、ただいま・・・」

見慣れているとはいえ、美形の笑顔は心臓に悪い。応接間に入りぴったりと障子を閉める。

恐らく、これから話される事实は、他に洩れてはならないことだ。

季和は、父親、季直の隣に腰を下ろした。一足先に向かった明良は明継の隣に座っていた。

父親達の周辺には、年代物の古文書が数枚ばらまかれている。

神官見習いであり、龍脈の守護者たる彼女は多少、旧文字に詳しい。簡単なものなら彼女も解読可能だったが、古文書に書かれている文字はあまりに難解であった。

これは、解読は難しい。

宮家の当主たる明継と季直はこの古文書を解読できる術すべを会得しているのだろう。

そうでなければ、彼らの前に古文書が散らばっているはずが無い。

「父さん、これ・・・」

古文書を指差した彼女に、「ああ・・・」と季直は頷いて、予想通

りの答えを口にする。

「宮家が代々継いできた、龍脈の資料だよ」

不明なことが多すぎる龍脈だが、宮家の先祖たちは何もしなかったわけではなかった。

彼らは数多くの推測、検証を経て、それらをまとめ、書物に纏めた。それを代々、宮家は引き継いできた。その貴重な資料群は、現在、今回のような事例に活用されている。

「季ちゃん、これを見てくれないか？」

と明継が、季和に見せたのは古地図の一種。地図上のあちこちに×印が記されていた。

「多分、季ちゃんには理解できると思うけど・・・」

じっくりとその古地図を眺めた彼女は、こっくりと頷く。

間違いない――

「龍脈の封印・・・」

その通りと明継は笑った。

多少、地形などは変わっているが、それは間違いなく彼女が毎夜、巡回している龍脈の封印がある場所だった。

この古地図が示すのは、今ある封印がかなり昔から存在していたということに他ならない。

「昔の各務ってこんな地形だったのか・・・」

明良が感心したように、古地図を覗き込む。紙の質からして、戦前のように思えた。

和紙は、現代の紙と違って100年以上も残ると言われている。

「まあ、この時代から大震災や洪水、台風やらで地形が変わってし

まった場所もあるけどね」

明継の言葉に、季和は再び古地図に視線を落とした。

今では川になっている場所に集落や田畑が描かれているのを発見した。

恐らく、その時代からこの古地図は大切に保管され、伝えられてきたのだ。

それは、この各務を守るための資料となることを知っていたからだろう。

「次はこれだね」と明継が次に季和に見せたのは、前と同じような古地図であつたが、何やら古めかしい文字が地図上に墨で記されていた。

「ええと、なにになに・・・」

季和はその古地図の文字に見入る。これぐらいの文字なら彼女も解読できる。

「明治元年、年の瀬、大風あり。民家数件が屋根を飛ばされるなど被害あり。

事前に龍脈の封印を解いたことに関係あるのだろうか。」

古地図の随所にそういった記述が記されていた。

「この龍脈の封印を解いたら、こういった被害が出たというメモみたいなものか」

うーむと明良は腕を組む。季和は別の場所に記されていた文字を解読しようとした。

「明治5年、水無月、鉄砲水発生。川辺で遊んでいた子供ら数人が溺死した。予測できず、幼い命が失われ、自分の不甲斐なさが残念でならない」

衝撃的な内容だ。後半の文字には悔しさがにじみ出ているようで、少し筆が乱れていた。

「これは当時の守護者が記したものでしょうか・・・」

ぼつりと呟いた彼女の目の前に一冊の和綴じの本が置かれた。顔を上げると、そこには明継の綺麗な顔があった。

「これは・・・？」

「明治初期の一之宮当主の日記、季ちゃん、読めるかい？」

と言われ、季和は和綴じの本を手にとった。日に当たったからなのか、少し表紙が茶色く変色している。

明治という約100年以上前のものだが、保存状態がかなりいい。とても百年前のものとは思えなかった。

一之宮家で代々、丁寧に保存されてきた所以だろう。

貴重な文献の表紙を破かないように、汚さないようにと細心の注意を払って捲る。

和紙一面にびっしりと書き込まれた文字達。さすがにこれだけの文字を解読するのは難しかった。

何とか読めそうな文字を見つけ、それらを組み合わせ、日記の内容を解読していく。

「ん・・・？」

何とか解読していく中で、その文字達にどこか既知感を覚えた。

それはある一文を目にして、確信に至った。先程まで読んでいた古文書に目を向ける。

間違いない・・・！この日記を書いた人物は、古文書に文字を記した人物と同一人物だ・・・！

彼女が確信に至った経緯は、日記に古文書に記された一文と同じ一文のものが記されていたからだった。

些細な違いはあるものの、記されている内容は全く同じものであるし、何より筆跡が類似している。

既知感の正体は氷解したのだが、それとは別の疑問で、彼女は違和感に頭を悩ますことになった。

どうして、一之宮家当主が守護者を・・・？

基本的に一之宮家当主は守護者候補から外される。

本来なら明良の守人でさえ、考えられないことなのだ。

二之宮家は断絶しているし、三之宮家にも人選に適う相手がいなかったため、仕方なく一之宮家の明良が選ばれたに過ぎない。

疑問に感じながらも、日記を読み進めていくと疑問は氷解した。

ああ、なるほどね、立候補したのね・・・

日記には彼の、守護者としてのなみなみならぬ決意、誇り、プライドが克明に記されていた。

この文章のところは筆跡が力強い。

守護者としてなみなみならぬ決意、誇り、プライドを持っていたからこそ、子供の命が奪われたというのは、衝撃的であったのだろう。古文書と日記を交互に眺めながら、彼女は口を開いた。

「素人考えだけど、意見出してもいいかな・・・」

「勿論、と言うより、季ちゃんは当事者なんだから、口を出して当然の権利があるよ？」

明継はにこにこ笑いながら、先を促した。

「封印を外すのは比較的被害のなさそうな封印を4つ」

彼女は左手の指を4本立てる。「ほう・・・？」と明継の目が興味深そうに細められる。

「その心は？」

「簡単に言えば東西南北、ひとつずつ封印を解くことで封印を解かれた龍脈のエネルギーを分散できる」

龍脈のエネルギーはひとつ解くだけでも膨大だ。近くの封印を解く事でそれらが合流してしまうとさらに強大なエネルギーが発生する。それは避けたかった。だから、町の東西南北の封印を各一つずつ解くことを提案したのである。

「そうすると、一日で廻るのは無理そうだね」

季和は頷く。

「元々4日かけて行いたいと思っていたから」

いくら、遠いといっても、エネルギーが合流しないとは限らない。

一日置くことで、完全とはいいがたいが、エネルギーが合流するリスクを極力下げたい。

「うん、僕らも同じ考え」と明継は季直に視線を移すと、彼もこつくりと頷いた。

「やっぱり親子だね、季直も季ちゃんと同じ意見を持っていたからね」

「父さんが・・・？」

うんうんと頷く彼に、季和は驚いて目を見張る。

視線を移せば、父親はばつが悪そうに眼を背けて、退出した。

「何だかんだいって、季ちゃんは一人娘だし、危険な目に合わせたくないのがあいつの本音だろうよ」

父親の後姿を眺めながら、明継がぽつりと呟いた言葉が季和の耳朶に響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8253w/>

龍の哭くとき

2011年11月20日12時49分発行